三一書房
日本現代文学
全集 39
石川啄木集

日本現代文學全集・講談社版 39

石川啄木集

編集　整
伊藤　郎
亀井勝
中村光夫
平野謙
山本健吉

日本現代文學全集
39
石川啄木集

編集
伊藤整
龜井勝一郎
中村光夫
平野謙
山本健吉

昭和39年2月10日 印刷
昭和39年2月19日 發行
定價 500圓
© KŌDANSHA 1964

著者 石川啄木（いしかわたくぼく）

發行者 野間省一

印刷者 北島織衞

發行所 株式會社 講談社
東京都文京區音羽町3～19
電話東京 (942) 1111 (大代表)
振替東京 3930

印刷 大日本印刷株式會社
寫眞製版印刷 株式會社興陽社
製本 大製株式會社
製函 株式會社岡山紙器所
株式會社第一紙藝社
背革 小林榮商事株式會社
表紙クロス 日本クロス工業株式會社
口繪用紙 日本加工製紙株式會社
本文用紙 本州製紙株式會社
函貼用紙 安倍川工業株式會社
見返し用紙 三菱製紙株式會社
扉用紙 神崎製紙株式會社

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします

石川啄木集　目次

卷頭寫眞

筆　蹟

一握の砂……五
悲しき玩具……三
あこがれ　抄……四一
『あこがれ』以後……四九
「ハコダテの歌」より
「呼子と口笛」まで　抄……六九
雲は天才である……六九
弓町より　食ふべき詩……九〇
文學と政治……九五
性急な思想……九七
硝子窓……九九
時代閉塞の現狀……一〇三
歌のいろ〳〵……一〇九
郁雨に與ふ……一一三
日　記
明治三十五年……一一九
明治三十七年……一二四

明治三十九年……一五三
明治四十年……一九四
明治四十一年……二三七
明治四十二年……三四五
明治四十三年……三七五
明治四十四年……三八〇
明治四十五年……四〇九

作品解説……龜井勝一郎　四一八
石川啄木入門……伊藤信吉　四二四
年　譜……四三三
參考文獻……四四三

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

石川啄木集

孤々の声をなげてより十有七年。父母の膝下を辞して杜陵の空に生ふること八星霜。前途未だ漠として浮雲を入る。古の秋流轉の水流を従て校を辞し友とこのれ双親とはなれ故山を去り恋ふ子の美き面影とさへこのれて孤影飄然東都を出づ。嗟乎、何人かよく遊子胸奥の天絃を知音たる者ぞ。

秋鼓笛鍬は古の流出の日より起したる日誌也

別花かは花を、砕こは琴の夢追ふ子追ふて旅する筆の秋よ。

天琴に誰かよき音の幸守ふむ秋掩ふ雲にてかれて去ぬる。

明治三十五年秋　白蘋詩堂

一握の砂

函館なる郁雨宮崎大四郎君
同國の友文學士花明金田一京助君
この集を兩君に捧ぐ。予はすでに予のすべてを兩君の前に示しつくしたるものの如し。從つて兩君はここに歌はれたる歌の一一につきて最も多く知る人なるを信ずればなり。
また一本をとりて亡兒眞一に手向く。この集の稿本を書肆の手に渡したるは汝の生れたる朝なりき。この集の稿料は汝の藥餌となりたり。而してこの集の見本刷を予の閲したるは汝の火葬の夜なりき。

著者

明治四十一年夏以後の作一千餘首中より五百五十一首を拔きてこの集に收む。集中五章、感興の來由するところ相適きをたづねて假にわかてるのみ。「秋風のこころよさに」は明治四十一年秋の紀念なり。

我を愛する歌

東海の小島の磯の白砂に
われ泣きぬれて
蟹とたはむる

頬につたふ
なみだのごはず
一握の砂を示しし人を忘れず

大海にむかひて一人
七八日
泣きなむとすと家を出でにき

いたく錆びしピストル出でぬ
砂山の
砂を指もて掘りてありしに

ひと夜さに嵐來りて築きたる
この砂山は
何の墓ぞも

砂山の砂に腹這ひ
初戀の
いたみを遠くおもひ出づる日

砂山の裾によこたはる流木に
あたり見まはし
物言ひてみる

いのちなき砂のかなしさよ
さらさらと
握れば指のあひだより落つ

しつとりと
なみだを吸へる砂の玉
なみだは重きものにしあるかな

大といふ字を百あまり
砂に書き
死ぬことをやめて歸り來れり

目さまして猶起き出でぬ兒の癖は
かなしき癖ぞ
母よ咎むな

ひと塊の土に涎し
泣く母の肖顔つくりぬ
かなしくもあるか

燈影なき室に我あり
父と母
壁のなかより杖つきて出づ

たはむれに母を背負ひて
そのあまり輕きに泣きて
三歩あゆまず

飄然と家を出でては
飄然と歸りし癖よ
友はわらへど

ふるさとの父の咳する度に斯く
咳の出づるや
病めばはかなし

わが泣くを少女等きかば
病犬の
月に吠ゆるに似たりといふらむ

何處やらむかすかに蟲のなくごとき
こころ細さを
今日もおぼゆる

いと暗き
穴に心を吸はれゆくごとく思ひて
つかれて眠る

こころよく
我にはたらく仕事あれ
それを仕遂げて死なむと思ふ

こみ合へる電車の隅に
ちぢこまる
ゆふべゆふべの我のいとしさ

淺草の夜のにぎはひに
まぎれ入り
まぎれ出で來しさびしき心

愛犬の耳斬りてみぬ

あはれこれも
物に倦みたる心にかあらむ

鏡とり
能ふかぎりのさまざまの顏をしてみぬ
泣き飽きし時

なみだなみだ
不思議なるかな
それをもて洗へば心戯けたくなれり

呆れたる母の言葉に
氣がつけば
茶碗を箸もて敲きてありき

草に臥て
おもふことなし
わが額に糞して鳥は空に遊べり

わが髭の
下向く癖がいきどほろし
このごろ憎き男に似たれば

森の奥より銃聲聞ゆ
あはれあはれ
自ら死ぬる音のよろしさ

大木の幹に耳あて
小半日

堅き皮をばむしりてありき
「さばかりの事に死ぬるや」
「さばかりの事に生くるや」
止せ止せ問答

まれにある
この平なる心には
時計の鳴るもおもしろく聽く

ふと深き怖れを覺え
ぢつとして
やがて靜かに臍をまさぐる

高山のいただきに登り
なにがなしに帽子をふりて
下り來しかな

何處やらに澤山の人があらそひて
鬩引くごとし
われも引きたし

怒る時
かならずひとつ鉢を割り
九百九十九割りて死なまし

いつも逢ふ電車の中の小男の
稜ある眼
このごろ氣になる

鏡屋の前に來て
ふと驚きぬ
見すぼらしげに歩むものかも

何となく汽車に乘りたく思ひしのみ
汽車を下りしに
ゆくところなし

空家に入り
煙草のみたることありき
あはれただ一人居たきばかりに

何がなしに
さびしくなれば出てあるく男となりて
三月にもなれり

やはらかに積れる雪に
熱てる頰を埋むるごとき
戀してみたし

かなしきは
飽くなき利己の一念を
持てあましたる男にありけり

手も足も
室いつぱいに投げ出して
やがて靜かにおきかへるかな

百年の長き眠りの覺めしごと
呟呻してまし
思ふことなしに

腕拱みて
このごろ思ふ
大いなる敵目の前に躍り出でよと

手が白く
且つ大なりき
非凡なる人といはるる男に會ひしに

こころよく
人を讃めてみたくなりにけり
利己の心に倦めるさびしさ

雨降れば
わが家の人誰も誰も沈める顏す
雨霽れよかし

高きより飛びおりるごとき心もて
この一生を
終るすべなきか

この日頃
ひそかに胸にやどりたる悔あり
われを笑はしめざり

へつらひを聞けば
腹立つわがこころ
あまりに我を知るがかなしき

知らぬ家たたき起して
遁げ來るがおもしろかりし
昔の戀しさ

非凡なる人のごとくにふるまへる
後のさびしさは
何にかたぐへむ

大いなる彼の身體が
憎かりき
その前にゆきて物を言ふ時

實務には役に立たざるうた人と
我を見る人に
金借りにけり

遠くより笛の音きこゆ
うなだれてある故やらむ
なみだ流るる

それもよしこれもよしとてある人の
その氣がるさを
欲しくなりたり

死ぬことを
持藥をのむがごとくにも我はおもへり

心いためば
路傍に犬ながながと呟呻しぬ
われも眞似しぬ
うらやましさに

眞劍になりて竹もて犬を擊つ
小兒の顏を
よしと思へり

ダイナモの
重き唸りのここちよさよ
あはれこのごとく物を言はまし
剽輕の性なりし友の死顏の
靑き疲れが
いまも目にあり

氣の變る人に仕へて
つくづくと
わが世がいやになりにけるかな
龍のごとくむなしき空に躍り出でて
消えゆく煙
見れば飽かなく

こころよき疲れなるかな
息もつかず
仕事をしたる後のこの疲れ

空寢入生呟呻など
なぜするや
思ふこと人にさとらせぬため

箸止めてふつと思ひぬ
やうやくに
世のならはしに慣れにけるかな

朝はやく
婚期を過ぎし妹の
戀文めける文を讀めりけり

しつとりと
水を吸ひたる海綿の
重さに似たる心地おぼゆる

死ね死ねと己を怒り
もだしたる
心の底の暗きむなしさ

けものめく顏あり口をあけたてす
とのみ見てゐぬ
人の語るを

親と子と
はなればなれの心もて靜かに對ふ
氣まづきや何ぞ

かの船の
かの航海の船客の一人にてありき
死にかねたるは

目の前の菓子皿などを
かりかりと嚙みてみたくなりぬ
もどかしきかな

よく笑ふ若き男の
死にたらば
すこしはこの世のさびしくもなれ

何がなしに
息きれるまで驅け出してみたくなりたり
草原などを

あたらしき背廣など着て
旅をせむ
しかく今年も思ひ過ぎたる

ことさらに燈火を消して
まぢまぢと思ひてゐしは
わけもなきこと

淺草の凌雲閣のいただきに
腕組みし日の
長き日記かな

尋常のおどけならむや
ナイフ持ち死ぬまねをする

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

その顔その顔
こそこその話がやがて高くなり
ピストル鳴りて
人生終る

時ありて
子供のやうにたはむれす
戀ある人のなさぬ業かな

とかくして家を出づれば
日光のあたたかさあり
息ふかく吸ふ

つかれたる牛のよだれは
たらたらと
千萬年も盡きざるごとし

路傍の切石の上に
腕拱みて
空を見上ぐる男ありたり

何やらむ
穩かならぬ目付して
鶴嘴を打つ群を見てゐる

心より今日は逃げ去れり
病ある獣のごとき
不平逃げ去れり

おほどかの心來れり
あるくにも
腹に力のたまるがごとし

ただひとり泣かまほしさに
來て寢たる
宿屋の夜具のこころよさかな

友よさは
乞食の卑しさ厭ふなかれ
餓ゑたる時は我も爾りき

新しきインクのにほひ
栓拔けば
餓ゑたる腹に沁むがかなしも

かなしきは
喉のかわきをこらへつつ
夜寒の夜具にちぢこまる時

一度でも我に頭を下げさせし
人みな死ねと
いのりてしこと

我に似し友の二人よ
一人は死に
一人は牢を出でて今病む

あまりある才を抱きて
妻のため
おもひわづらふ友をかなしむ

打明けて語りて
何か損をせしごとく思ひて
友とわかれぬ

どんよりと
くもれる空を見てゐしに
人を殺したくなりにけるかな

人並の才に過ぎざる
わが友の
深き不平もあはれなるかな

誰が見てもとりどころなき男來て
威張りて歸りぬ
かなしくもあるか

はたらけど
はたらけど猶わが生活楽にならざり
ぢつと手を見る

何もかも行末の事みゆるごとき
このかなしみは
拭ひあへずも

とある日に

酒をのみたくてならぬごとく
今日われ切に金を欲りせり

水晶の玉をよろこびもてあそぶ
わがこの心
何の心ぞ

事もなく
且つこころよく肥えてゆく
わがこのごろの物足らぬかな

大いなる水晶の玉を
ひとつ欲し
それにむかひて物を思はむ

うぬ惚るる友に
合槌うちてゐぬ
施與をするごとき心に

ある朝のかなしき夢のさめぎはに
鼻に入り來し
味噌を煮る香よ

こつこつと空地に石をきざむ音
耳につき來ぬ
家に入るまで

何がなしに
頭のなかに崖ありて

日毎に土のくづるるごとし
遠方に電話の鈴の鳴るごとく
今日も耳鳴る
かなしき日かな

垢じみし袷の襟よ
かなしくも
ふるさとの胡桃燒くるにほひす

死にたくてならぬ時あり
はばかりに人目を避けて
怖き顏する

一隊の兵を見送りて
かなしかり
何ぞ彼等のうれひ無げなる

邦人の顏たへがたく卑しげに
目にうつる日なり
家にこもらむ

この次の休日に一日寢てみむと
思ひすごしぬ
三年このかた

或る時のわれのこころを
燒きたての
麵麭に似たりと思ひけるかな

たんたらたらたんたらたらと
雨滴が
痛むあたまにひびくかなしさ

ある日のこと
室の障子をはりかへぬ
その日はそれにて心なごみき

かうしては居られずと思ひ
立ちにしが
戸外に馬の嘶きしまで

氣ぬけして廊下に立ちぬ
あららかに扉を推せしに
すぐ開きしかば

ぢつとして
黑はた赤のインク吸ひ
堅くかわける海綿を見る

誰が見ても
われをなつかしくなるごとき
長き手紙を書きたき夕

うすみどり
飲めば身體が水のごと透きとほるてふ
藥はなきか

いつも睨むランプに飽きて
三日ばかり
蠟燭の火にしたしめるかな

人間のつかはぬ言葉
ひよつとして
われのみ知れるごとく思ふ日

あたらしき心もとめて
名も知らぬ
街など今日もさまよひて來ぬ

友がみなわれよりえらく見ゆる日よ
花を買ひ來て
妻としたしむ

何すれば
此處に我ありや
時にかく打驚きて室を眺むる

人ありて電車のなかに唾を吐く
それにも
心いたまむとしき

夜明けまであそびてくらす場所が欲し
家をおもへば
こころ冷たし

人みなが家を持つてふかなしみよ

墓に入るごとく
かへりて眠る

何かひとつ不思議を示し
人みなのおどろくひまに
消えむと思ふ

人といふ人のこころに
一人づつ囚人がゐて
うめくかなしさ

叱られて
わつと泣き出す子供心
その心にもなりてみたきかな

盗むてふことさへ惡しと思ひえぬ
心はかなし
かくれ家もなし

放たれし女のごときかなしみを
よわき男の
感ずる日なり

庭石に
はたと時計をなげうてる
昔のわれの怒りいとしも

顏あかめ怒りしことが
あくる日は

さほどにもなきをさびしがるかな
いらだてる心よ汝はかなしかり
いざいざ
すこし呟呻などせむ

女あり
わがいひつけに背かじと心を碎く
見ればかなしも

ふがひなき
わが日の本の女等を
秋雨の夜にののしりしかな

男とうまれ男と交り
負けてをり
かるがゆゑにや秋が身に沁む

わが抱く思想はすべて
金なきに因するごとし
秋の風吹く

くだらない小説を書きてよろこべる
男憐れなり
初秋の風

秋の風
今日よりは彼のふやけたる男に
口を利かじと思ふ

はても見えぬ
眞直の街をあゆむごとき
こころを今日は持ちえたるかな

何事も思ふことなく
いそがしく
暮らせし一日を忘れじと思ふ

何事も金金とわらひ
すこし經て
またも俄かに不平つのり來

誰そ我に
ピストルにても擊てよかし
伊藤のごとく死にて見せなむ

やとばかり
桂首相に手とられし夢みて覺めぬ
秋の夜の二時

煙

一

病のごと
思鄕のこころ湧く日なり
目にあをぞらの煙かなしも

己が名をほのかに呼びて
涙せし
十四の春にかへる術なし

青空に消えゆく煙
さびしくも消えゆく煙
われにし似るか

かの旅の汽車の車掌が
ゆくりなくも
我が中學の友なりしかな

ほとばしる喞筒の水の
心地よさよ
しばしは若きこころもて見る

師も友も知らで責めにき
謎に似る
わが學業のおこたりの因

教室の窓より遁げて
ただ一人
かの城あとに寢にゆきしかな

不來方のお城の草に寢ころびて
空に吸はれし
十五のこころ

かなしみと言はば言ふべき
物の味
われの嘗めしは餘りに早かり

晴れし空仰げばいつも
口笛を吹きたくなりて
吹きて遊びき

夜寢ても口ぶえ吹きぬ
口ぶえは
十五のわれの歌にしありけり

よく叱る師ありき
髯の似たるより山羊と名づけて
口眞似もしき

われと共に
小鳥に石を投げてあそぶ
後備大尉の子もありしかな

城址の
石に腰掛け
禁制の木の實をひとり味ひしこと

その後に我を棄てし友も
あのころは共に書讀み
共にあそびき

學校の圖書庫の裏の秋の草
黄なる花咲きし

今も名知らず

花散れば
まづ人さきに白の服着て家出づる
われにてありしか

今は亡き姉の戀人のおとうととなかよくせしを
悲しと思ふ

夏やすみ果ててそのまま
歸り來ぬ
若き英語の教師もありき

ストライキ思ひ出でても
今は早や吾が血躍らず
ひそかにさびし

盛岡の中學校の
バルコンの
欄干に最一度われを倚らしめ
神有りと言ひ張る友を
說きふせし
かの路ばたの栗の樹の下

西風に
丸大路のさくらの葉
かさこそ散るを踏みて遊びき

そのかみの愛讀の書よ
大方は
今は流行らずなりにけるかな

石ひとつ
坂をくだるがごとくにも
我けふの日に到り着きたる

愁へある少年の眼にうらやみき
小鳥の飛ぶを
飛びて歌ふを

解剖せし
蚯蚓のいのちもかなしかり
かの校庭の木柵の下

かぎりなき知識の慾に燃ゆる眼を
姉は傷みき
人戀ふるかと

蘇峯の書をわれに薦めし友はやく
校をしりぞきぬ
貧しさのため

おどけたる手つき可笑と
我のみはいつも笑ひき
博學の師を

自が才に身をあやまちし人のこと
語り聞かせし
師もありしかな

そのかみの學校一のなまけ者
今は眞面目に
はたらきて居り

田舍めく旅の姿を
三日ばかり都に曝し
かへる友かな

茨島の松のなみ木の街道を
我とゆきし少女
才をたのみき

眼を病みて黑き眼鏡をかけし頃
その頃よ
一人泣くをおぼえし

わがこころ
けふもひそかに泣かむとす
友みな己が道をあゆめり

先んじて戀のあまさと
かなしさを知りし我なり
先んじて老ゆ

興來れば

友涙垂れ手を揮りて
醉ひどれの如くなりて語りき

人ごみの中をわけ來る
我が友の
昔ながらの太き杖かな

見よげなる年賀の文を書く人と
おもひ過ぎにき
三年ばかりは

夢さめてふつと悲しむ
わが眠り
昔のごとく安からぬかな

そのむかし秀才の名の高かりし
友牢にあり
秋のかぜ吹く

近眼にて
おどけし歌をよみ出でし
茂雄の戀もかなしかりしか

わが妻のむかしの願ひ
音樂のことにかかりき
今はうたはず

友はみな或日四方に散り行きぬ
その後八年

名擧げしもなし

わが戀を
はじめて友にうち明けし夜のことなど
思ひ出づる日

絲きれし紙鳶のごとくに
若き日の心かろくも
とびさりしかな

二

ふるさとの訛なつかし
停車場の人ごみの中に
そを聽きにゆく

やまひある獸のごとき
わがこころ
ふるさとのこと聞けばおとなし

ふと思ふ
ふるさとにゐて日毎聽きし雀の鳴くを
三年聽かざり

亡くなれる師がその昔
たまひたる
地理の本など取りいでて見る

その昔
小學校の柾屋根に我が投げし鞠

いかにかなりけむ

ふるさとの
かの路傍のすて石よ
今年も草に埋もれしらむ

わかれをれば妹いとしも
赤き緒の
下駄など欲しとわめく子なりし

二日前に山の繪見しが
今朝になりて
にはかに戀しふるさとの山

飴賣のチャルメラ聽けば
うしなひし
をさなき心ひろへるごとし

このごろは
母も時時ふるさとのことを言ひ出づ
秋に入れるなり

それとなく
郷里のことなど語り出でて
秋の夜に燒く餅のにほひかな

かにかくに澁民村は戀しかり
おもひでの山
おもひでの川

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com